

PARTICIPANTS 2013

※このプロフィールは2013年開催時のものです。

ピコ・アイヤー



長年のベストセラー「Video Night in Kathmandu」、「The Lady and the Monk」（来日1年目について書いた作品）、「The Global Soul and The Open Road」を含む10冊の著作がある。1986年以降タイム誌のエッセイスト。ヴァニティフェア誌からナショナル・ジオグラフィック誌まで世界の150以上の雑誌に多数寄稿している。著作は10カ国語以上に翻訳され、ハリウッドとも契約している。イギリスのオックスフォードで生まれ、イートン、オックスフォード、ハーバードで学んだ。1987年から西日本在住。

東浩紀



1971年東京都生まれ。『動物化するポストモダン』ではオタクとポストモダンを論じ、『一般意志2.0』では新たな社会思想を提示した思想家・小説家。株式会社ゲンロン代表として、雑誌「思想地図β」の発行やカフェ運営も。

池澤夏樹



作家。1945年北海道帯広市に生まれる。小学校から後は東京育ち。以後、3年をギリシャで、10年を沖縄で、5年をフランスで過ごして、今は札幌在住。

1987年に『スティル・ライフ』で芥川賞を受賞。その後の作品に『マシアス・ギリの失脚(The Navidad Incident)』、『花を運ぶ妹(Burden of Flowers)』、『静かな大地(Peaceful Earth)』、『キップをなくして(Lost in the Tokyo Station)』、『カデナ(Kadena)』など。2011年3月11日の東北大震災に関わる著作として、『楽しい終末(a Happy Ending)』（電子版）、自然と人間の関係を扱った『母なる自然のおっぱい(Mother-Nature's Breast Feeding)』、天災をテーマとした『真昼のプリニウス(Mt. Asama)』、風力発電を書いた『すばらしい新世界(Brave New World)』ならびにその続篇『光の指で触れよ(Touch with the Finger of Light)』がある。

更に、震災の全体像を描く試みとして長篇エッセー『春を恨んだりはしない(I don't reproach the spring)』を震災の半年後に出した。震災二年後の先日、被災地を舞台にした小説『双頭の船(The Double-Headed Boat)』を刊行した。

いしいしんじ



1966年大阪生まれ。1996年、短篇集『とーきょーいしいあるき』刊行（のち『東京夜話』に改題して文庫化）。2000年、初の長篇『ぶらんこ乗り』刊行。2003年『麦ふみクーツェ』で坪田譲治文学賞受賞。2013年『ある一日』で第29回織田作之助賞。その他の著書に、2004年『プラネタリウムのふたご』、2006年『ポーの話』、2007年『みずうみ』他。

市川真人



作家、編集責任者、文芸批評家。早稲田大学を卒業後、近畿大学大学院文芸学研究科日本文学専攻創作・批評コース修了。
現在は、文学雑誌「早稲田文学」の編集責任者、プランナー/ディレクターであるとともに、母校の講師を務めている。「芥川賞はなぜ村上春樹に与えられなかったか」の他に、前田壘の名前で「紙の本が亡びるとき?」、「小説の設計図（メカニクス）」などの評論作品も出版している。

浦沢直樹



作家、編集責任者、文芸批評家。早稲田大学を卒業後、近畿大学大学院文芸学研究科日本文学専攻創作・批評コース修了。
当世を代表する漫画家。『YAWARA!』『Happy!』『MONSTER』『20世紀少年』『PLUTO』『BILLY BAT』など、日本人ならば誰もが知るエンターテインメント作品を30年間にわたり描き続けている。

マイケル・エメリック



1975年ニューヨーク生まれ。日本文学研究者であり、翻訳家として活躍。よしもとばなな、川上弘美、古川日出男、高橋源一郎、松浦理英子などの英訳を手がける。カリフォルニア大学サンタバーバラ校准教授。

円城塔



小説家。1972年生。理学部物理学科に学び、システム・エンジニアとして働きながら小松左京賞に応募した作品でSF作家としてデビュー、ほぼ同時に純文学の文学界新人賞を受賞。さまざまな意匠の混在する作品を描く。著作に『道化師の蝶』（芥川賞）など。

小野正嗣



小説家・比較文学者（現代フランス語圏）。著書に『水に埋もれる墓』（朝日新人文学賞）『にぎやかな湾に背負われた船』（三島由紀夫賞）『森のはずれで』『マイクロバス』『浦からマグノリアの庭へ』など。共訳書に『ミゲル・ストリート』『ガラスの宮殿』など。パリ第8大学で博士号を取得。明治学院大学文学部専任講師。